百々裏話（27）

おもて　あきら

【観世の名称について】

観世会から発行しているパンフレット『演能の栞』昭和37年4月号の編集後記に、

「観世」という名称は、流祖の観阿弥と、その息であり能の大成者である世阿弥との頭の一字宛をとってつけられた事は誰しもの知っておられる事と存じます。

という記事が出ていた。観阿弥の「観」と世阿弥の「世」を合わせて「観世」と言うようになったとする右の説は、実は誤まりであって、そうではない事を誰しもに知っていていただきたいのである。

観世座・観世流の「観世」は、始祖観阿弥の芸名的通称に基づいている。観阿弥が早くから世人に「観世」と呼ばれていたことは、『後愚昧記』の永和四年（一三七八）の記事に、少年時代の世阿弥に相違ない「大和猿楽児童」を、「称観世之猿楽法師子也」と注していることから明確である。「観世の猿楽と称する法師」というのが観阿弥清次なのである。世阿弥自身も、父のことを、「亡父観世」（五音）とか「当流の先士観世」（三道）とか記録している。観阿弥は通称が三郎、実名が清次、法名が観阿であり、座名は結崎であったから、「観世」というのは、その由来はともかくとして、彼の芸名的な通称であったらしい。その「観世」が、観阿弥個人の芸名から座名に転ずる過程については、香西精氏の「光太郎金春考」（『世阿弥新考』所収）に考察があるが、初代観阿弥時代の「観世」は個人の芸名、二代世阿弥の頃に家の名の実体を備え、三代元雅の時代には観世大夫個人の芸名と一門の家名とを兼ね、四代音阿弥以後になって完全な家名・座名・流名になったのであろうとの結論は、恐らく当を得た推論であろうと思われる。

ところで、観阿弥の「観世」は、多分彼の幼名であったろうと推測されている。『観世小次郎画像讃』に見える観阿弥伝説――観阿弥の父服部氏が長谷観音に参詣した際に、観音の化身らしい老僧から、第三子であった清次に「観世」の名を賜わったとの話――がその典拠らしく、慶長四年の奥書がある『申楽聞書』（続群書類従）では「観世」を「これはもと児の名也」と断言しており、室町末期には既に有力を説として流布していたと見られる。江戸時代になってこの説は一そう一般化したようで、諸書に同じ説が出てくる。十六代観世大夫元章編『二百拾番謡目録』では、観阿弥の雅名（稚名＝児名か）を「観世丸（ミヨマル）」としているが、ミヨマルと読ませたのは、後人のさかしらと言うべきであろう。たとい観阿弥の幼名が「観世丸」であっても、それはクワンゼマルと読むべきもので、ミヨマルではあるまい。それはともかく、能勢朝次博士が「又、観世という名は、清次の幼名観世丸より発したものであらうということは、信じて良いであらう」（能楽源流考六九六頁）と言っておられるのを見ても、「観世」が観阿弥の幼名であったとの説は、近代の学説に於いてもほぼ承認されているかのようである。

しかし、「観世」観阿弥幼名説に対し、私は少々疑念を抱いている。室町中期の作とは言え、観阿弥の伝説についてはあまり信用できない『観世小次郎画像讃』以外に格別の証拠がないことは第一の理由であり、もともとは結崎・外山・円満井・坂戸という名を持っていた大和猿楽四座が、ほぼ同じ頃に観世・宝生・金春・金剛を座名として用い初めている事実と無関係に「観世」の名の由来を考えるわけには行かないのではないかとの危惧が第二の理由である。四座の新しい座名がみ

な幼名に発しているとはまず考えられまい。後世の伝書には、四座の名をすべて幼名に基づくとした説もあるが、信用し得る史料ではない。金春の場合は、『申楽談儀』に名の見える金春権守の幼名から発したのであろうとの学説があるが、これも実は「観世」観阿弥幼名説を後楯にして提起されている推測であって、今の場合参考にはできない。観阿弥は伊賀で新しい猿楽座を結成したという（申楽談儀）が、「結崎」という座名は多分大和へ進出してから後の名であろう。「観世」が結崎より先か後かは明徴がないが、円満井座と金春、坂戸座と金剛の関係から類推すると、観世の名の方が後である可能性が強い。となると、「観世」が観阿弥の幼名であることの可能性は減少するのではなかろうか。結崎・外山・円満井・坂戸の四座が、ほぼ同じ頃から観世・宝生・金春・金剛と仏様まがいの名を称するようになった背景に、大和猿楽四座が春日興福寺附属の猿楽座の地位を獲得したことや、興福寺衆徒から大夫号を授与されたことが関係しているのではないか、と私は想像している。四座の新しい名が、大夫号とか権守号とかに密接につながっていることは宝生の名を冠する最も古い能役者が観阿弥の兄の「宝生大夫」であり、金剛・金春の名を持つ最古の役者が金春権守や金剛権守である事実からみて、ほぼ確かなようである。結崎座の棟梁であった清次が、興福寺衆徒から「観世大夫」なる称号を授けられて以来、「観世」が清次の芸名となったという事情も、「観世」幼名説以上に考慮してよいことではなかろうか。

「観世」が観阿弥清次の幼名であったかどうかは、右の如くいささか疑問である。しかし、「観世」が観阿弥の芸名的通称であったことは確実である。従って、前に述べた『演能の栞』の説は明らかに誤解なのであるが、これは別に栞の編集者の独断なのではなくて観世流の能役者の間に、かなり有力に伝承されていた説であった。「誰しもの知っておられる事」と栞が言っているところを見ると、今でも大半の玄人がそうなのかも知れない。江戸初期までの能の伝書類にはそうした説は見あたらず、管見では、宝暦十年の序を有する『秦曲正名閥言』の左の記事が、右の誤解説では最も早いようである。（原文は漢文であるが、書下して引用する）

相伝ふ、清次円通を崇敬し、日に長谷に詣し、百福を祈る。一日僧に池の上に遇ふ。僧視て曰く。若が子孫、世の音声を観ずるに宜し（宜レ観二世之音声一）。忽焉

K
FLORIST TEL 402 2587
花の店

ケイフローリストの人たちは、花を商品としてよりむしろ自分たちと同じひとつの生命としてあつかう。花はいきものであるという、このあたり前なことを感じさせてくれる花の店は少ない。
ケイフローリストはそのような店のひとつである。
谷川俊太郎

贈物には電話ひとつで……　青山1丁目・乃木坂間 TEL. 402/2587
ケイフローリスト

として見えず。清次意に謂へらく、僧は即ち大士なりと。乃ち其の金言を裁して観世を以て氏と為すと云ふ。……一説に……夫の観世の若きは、則ち音阿弥の時に当って、人目して観世と曰ふ。蓋し、其祖父の観の字、義父の世の字を取ると。

此の説を近しと為すと。

前半は、前述した観阿弥伝説が、父親ではなく清次自身が長谷観音の化身から「観世」という氏を授けられたように形を変えた説であり、後半が観阿弥の「観」と世阿弥の「世」を取って、音阿弥の頃から世人が「観世」と氏名・座名を通称するようになったとの説である。「此の説を近しと為す」と言うのであるから、『秦曲正名闕言』の著者渤海茂兵衛は、後説の方を前説よりは事実に近いと考えていたようであるが、観世流全体としては、「観世」観阿弥幼名説の方が有力であった。明治維新後、合理的な考え方が強くなるにつれて、観音信仰に修飾された伝説として伝わった幼名説よりも、後の一説の方が有力なものとなったもののようである。

どうでもよいことのようであるが、史料に裏付けられた確実な説なのであるから、「観世」の名が始祖観阿弥清次の芸名的な通称であったことぐらいは、少なくとも観世流の玄人には心得ておいてほしいものである。

（39・3・24）

『杜若』雑感

徳江元正

「物語の祖」として『竹取物語』と並び称された『伊勢物語』。これに材を仰いだ能はかなりの数にのぼるであろう。現行『雲林院』の原型とされる『ウンリンイン』〈『能本七番』・岩波大系本所収〉とか、元禄の番外百番に収められた『雪鬼』とか、なかなかいい曲がある。御伽草子にも、明らかに謡曲からの影響を受けたに違いないと思われる『業平夢物語』とか『花鳥風月』とかがある。後者はかなり広範囲にわたって読まれていたらしく、『伊勢物語』の啓蒙書としての味わいが濃厚である。そのヒロインの花鳥と風月との姉妹はおそらく羽黒修験派のあるき巫女の投影と考えられるが、公家上臈の扇絵合わせの席に招かれて業平の情事の数々を、ダイジェスト風にして梓の弓にかけつつ演じている。

『杜若』を鑑賞する前に、『井筒』を一読しその舞台経過を心得ておくと都合がよい。『井筒』の時代物風の味わい、『杜若』のやや世話がかった味わい、適切な引例ではないかもしれぬが、『夕顔』と『半蔀』との場合にも較べられようか。中世の演能記録〈『能楽源流考』〉に依ると、寛正五年（1464）の糺河原勧進猿楽三日目をはじめとして四七回を数え、廿七回の『井筒』を遥かに上廻っていたことを知り得る。ともに世阿弥作といわれ両者いずれが先行するのかなんとも判断はくだせないが、芸能の形としては『井筒』の方が古いのであろう。続いて中入りのないこの『杜若』。『井筒』〈物着〉（中入りのない特殊演出）のごときは、更にその次の時期の所産とでも言えようか。

曲の構成やシテの実体などいっこうに不明で、どうにでも考えられる。場面は一つ、単式のようでもあり複式のようでもある。複式のような錯覚を持つ一つの理由は、物着に依ってシテの女の性格が変わるからなのであろうか。御伽草子には異類物という分類項目があって、草木を擬人化したものも広くこの中に含めることがある。勿論、謡曲には「草木国土悉皆成仏」の思想が採り入れられている。和泉式部や紫式部や業平を「歌舞の菩薩の化現」とし「狂言綺語のたはむれ」の境地にあ